大谷大学　自己点検・評価報告書
2014 年度

真宗学科
仏教学科
哲学科
社会学科
歴史学科
文学科
国際文化学科
人文情報学科
教育・心理学科

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：真宗学科

記入責任者：一楽　真

基準：4-3	＜評定＞　A ＜自己点検・評価委員会評定＞　A

1.【2014 年度の目標等】

[目標]　演習Ⅰについて

真宗学の方法論を学ぶと共に親鸞の生涯と基本的な思想を学ぶ。そのために必要な読む力と書く力を身につけさせる指導の充実。

[達成基準]

「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。

[行動計画]

○テキスト『浄土の真宗』を読むことで、専門用語の読み方や意味に習熟させる。

○適宜、授業時に小レポートを課し、添削の上返却し、次回授業時に振り返りの材料として活用する。

○様々なレポート課題を通して聞く力、考える力、内容をまとめる力、自らの考えを表現する力を養う。

・5 月、親鸞ゆかりの旧跡を訪ね、調べたことと訪れての感想をレポートにして提出させる。

・5 月、新入生歓迎講演会を実施する。感想をレポートにして提出させる。

・11 月（日程は後日調整）学外講師を招いての特別講演会と座談会を実施する。感想をレポートにして提出させる。

○前期・後期の期末テストでは論述問題を中心に出題し、読み・考え・書く力を養うように意識させる。

○後期初めに、前期期末テストの答案を返却し、前期の学びを振り返る機会にする。

○春休み中に、一年間の真宗学の学びを振り返るレポートを課す（第 2 学年初めの履修指導並びに学習指導に活用する）。

2.【2014 年度の達成状況報告】

・全 4 クラスでほぼ共通して実施できた。なお、授業時における小レポートの実施及びその活用、並びに期末テストの返却については、各担当者の授業方針に委ねられているので、実施したクラスとしていないクラスとがある。

・後期に実施した学外講師を招いての特別講演会と座談会の詳細は、自己点検・評価報告書②に記載。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

文章能力の向上を意識して様々なレポート課題や期末テストにおける論述問題を課したが、学生の文章能力が向上していることが教員間で確認できた。また、クラスによっては授業時の小レポートを次回授業時にフィードバックしたり、前期期末テストの答案を添削の上、返却したりすることによって、学びを振り返る機会を与えることができた。

各クラスの指導教員間で、学生の状況を共有することができた。

[改善すべき事項]

各クラスにおける授業内容及び進捗状況、学生の様子などについて、より緊密な情報交換・意見交換を実施していく。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること
学生レポート「六角堂の説明」（親鸞の旧跡を訪れてのレポート） 学生レポート「真宗の学び」（新入生歓迎講演会レポート）

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 　共通教科書の使用やフィールドワークの採用といった工夫は評価できる。他方で、「必要な読む力と書く力を身につけさせる指導の充実」という共通「目標」を掲げているにもかかわらず、「授業時における小レポートの実施及びその活用、並びに期末テストの返却については（中略）実施したクラスとしていないクラスとがある」ので、今後はさらなる目標達成のために、レポートの実施と活用についての改善を期待したい。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：真宗学科

記入責任者：一楽　真

基準：4-3、6	＜評定＞　S ＜自己点検・評価委員会評定＞　S

※ 2013 年度の目標①を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

第 1 学年時における指導体制の充実

[達成基準]

「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。

[行動計画]

2012 年度および 2013 年度の実施により効果が確認できたので、2014 年度も引き続いて、学習意欲開発のための企画として、第 1 学年においては、学外講師を招聘しての講演会とそれに基づく教員も参加しての座談会を実施する。

○講演会を実施する。

○講演会を踏まえて座談会を実施する。（4 名の指導教員が第 1 学年全体の学生を把握し指導するために、座談会の司会は、クラス指導教員以外が担当する。）

○講演会・座談会についてのレポート提出を課す。

○4 名の指導教員はレポートの提出状況を相互に確認をする。

○レポートの内容に記述された学生の関心や感想を 4 名の指導教員が共有し、学生指導に資する。

○上記の内容を会議において学科全体にも周知する。

2.【2014 年度の達成状況報告】

※行動計画は、全て実施できた。

○学習意欲開発のために学外講師講演会・座談会を実施した。

日時：10 月 28 日（火）第 3 限　講演会（メディアホール）

講師：真城義麿氏（前大谷中・高等学校校長、善照寺住職）

講題：「学ぶこと・分かること」

第 4 限目に 5 班に分かれて座談会（響流館演習室 1～3 および講堂棟談話室 1、2）

○各クラスの指導教員に学生はレポートを提出した。

○またレポートの内容については 4 名の指導教員が他クラスのものも共有し、学生指導に活用できた。

○上記の内容を会議において学科全体にも周知した。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

第 1 学年の学外講師を招いた講演会と座談会は、終了後のレポートによると、普段の演習 I の授業とは異なった幅広い視点から真宗とは何かを考えたり、あるいは自己をみつめる良い機会となっている。また、座談会という形式にも新鮮味があったようで、他の学生の考えに刺激を受けるなどの期待された効果があったと認められる。座談会における発言やレポートを通して学生の関心や考えを教員が理解する貴重な機会ともなった。

[改善すべき事項]

特になし

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること
学生のレポート（3 名分）

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 　初年次に学外講師を招聘するのみならず、それをふまえてレポートを作成し、学生の思考を促すという取り組みはきわめて高く評価できる。根拠資料からも取り組みの成果が確認できる。今後も引き続き、同様の成果が得られるよう取り組んでいただきたい。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：真宗学科

記入責任者：一楽　真

基準：4-3、6	＜評定＞　S ＜自己点検・評価委員会評定＞　S

※ 2013 年度の目標②を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

第 2 学年時における指導体制の充実

[達成基準]

「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。

[行動計画]

2012 年度および 2013 年度の実施において効果が認められたので、2014 年度も引き続いて、学習意欲開発のための企画として、第 2 学年においては、比叡山登山を通してのフィールドワーク（親鸞の足跡を巡る）を実施する。

○実施に先立って事前学習を行う。

○比叡山登山および諸堂巡りを秋に実施する。(10 月に実施の予定)

○登山や諸堂巡りにおいては、教員は出来るだけ多くの学生と接触を持ち、学生の把握に努める。また学生同士もクラスの枠を超えて交流できるように促す。

○登山後に感想レポートを課す。

○4 名の指導教員は感想レポートの提出状況を相互に確認をする。

○4 名の指導教員は、登山・諸堂巡りや感想レポートを通して知り得た学生に関する情報を共有し、自分の担当クラスだけではなく、第 2 学年の学生全体の指導に責任をもって当たるようにする。

○上記の内容を会議において学科全体にも周知する。

2.【2014 年度の達成状況報告】

※行動計画は、全て実施できた。

学習意欲開発のためフィールドワーク（親鸞の足跡を巡る）を実施した。

10 月 19 日（日）9 時大学集合、大型バス 2 台で北山通と白川通の交差点まで移動、その後雲母坂から比叡山に登り、諸堂を巡った後、午後 2 時に現地解散。

○上記の内容を会議において学科全体にも周知した。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

第 2 学年の比叡山登山とフィールドワークは、終了後の学生のレポートによれば、初めて比叡山に登った者も多く、親鸞の足跡を自らたどることを通して、その生涯と思想について主体的・共感的に考える機会となっている。また一緒に山道を歩く中で学生と教員、学生同士の距離が縮まり、より細やかな指導のための関係作りに役立っている。以上のことから、第 2 学年時における指導体制の充実という効果が上がっていると認められる。

[改善すべき事項]

特になし

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること
大学 HP 掲載の実施報告 http://www.otani.ac.jp/news/nab3mq000003n3u4.html 参加学生のレポート（3 名分）

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 　事前学習、フィールドワーク、事後レポートをとおして学習意欲を喚起するのみでなく、それぞれの学生の性質を把握しようとする当学科の取り組みはきわめて高く評価できる。今後も引き続き、同様の成果が得られるよう取り組んでいただきたい。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：真宗学科

記入責任者：一楽　真

基準：4-3、6	＜評定＞　S ＜自己点検・評価委員会評定＞　S

※ 2013 年度の目標③を受けて

継続　　完了　　・　　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　　】）　　・　　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

第 1 学年から第 2 学年への移行時における指導体制の充実

[達成基準]

「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。

[行動計画]

第 1 学年から第 2 学年への接続や展開のために、第 1 学年の「学習計画レポート」を踏まえて第 2 学年冒頭での面談指導を 2014 年の年度初めに実施する。

○第 1 学年の春休みに、3 つの課題（①一年間の学びを振り返る。②学びにおける疑問や課題を整理する。③これからの学習計画を記す。）の「学習計画レポート」（1,000 字以上）を課す。

○レポートは、第 2 学年初めのクラス別懇談会時にクラス指導教員に提出する。

○指導教員は、提出されたレポートを踏まえて、学生に対する面談指導をオリエンテーション期間中に実施する。面談指導に際しては、必要に応じて第 1 学年の指導教員と連絡を取り、学生の実情を把握した上での学生指導を心がける。

○面談指導に際しては、学生の状況を見ながら履修モデルも活用する。

○上記の内容を会議において学科全体にも周知する。

2.【2014 年度の達成状況報告】

※行動計画は、全て実施できた。

春期休暇中のレポート課題を学年初めのオリエンテーションにおいて提出。その内容をもとに学生と教員が個人面談を行い、きめ細やかな学生指導を行った。

○上記の内容を会議において学科全体にも周知した。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

学生の課題レポートの内容によると、レポートの作成は、学生自身にとってこれまでの学習を振り返ると共に今後の学習を考える好機となっている。また、そのレポートを踏まえての面談による履修指導は、指導教員にとって学生の実情や関心を把握する良い機会であり、同時に学生と教員との関係作りのきっかけとなり、その後の指導に有効なものとなっている。

[改善すべき事項]

特になし

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

・春期休暇課題指示のプリント

・提出された課題レポート（1 名分）

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 　レポートと面談による、第 1 学年から第 2 学年への接続の試みはきわめて高く評価できる。とりわけ、レポートをもとにした履修指導は、留年や退学を減少させる有効な手段となりうるだろう。今後も引き続き、同様の成果が得られるよう取り組んでいただきたい。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：真宗学科

記入責任者：一楽　真

基準：6	＜評定＞　A ＜自己点検・評価委員会評定＞　A

※ 2013 年度の目標④を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

第 2 学年後半の指導体制の充実

[達成基準]

「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。

[行動計画]

真宗学科の学生が学科および大学における学びを体系的にイメージできるように履修指導をする。

○上記の趣旨に則り、第 2 学年の後半に、第 2 学年から第 3 学年に向けての面談指導を実施する。

・第 3 学年以降の履修に関する指導において、第 2 学年年度初めの面談指導やその際に使用した「学習計画レポート」も踏まえながら、教員は必要に応じて履修モデルも活用して指導をする。

・履修モデルを用いての学習指導が相応しい学生とそうでない学生の各人の実情を十分に踏まえたきめ細やかな学習指導をする。

・教員は学生の学習状況を把握する機会とし、学生には入学後の学びを振り返らせる機会とする。

・第 3 学年でのゼミ決定や、可能ならば卒論も視野に入れて面談を行なう。

・できるだけ丁寧に、第 3 学年からのゼミに関する情報を提示する。

・ゼミ担当教員のオフィスアワーを積極的に利用して、相談に行くように促す。

・第 3 学年編入の学生の指導については、学年初めのオリエンテーションにおける「指導教員決定及びゼミ懇談会」の際、編入生を対象とした説明の機会を設ける。そのことを通して、ゼミ決定やゼミでの学習に戸惑うことがないように配慮した指導を行う。

○上記の内容を会議において学科全体にも周知する。

2.【2014 年度の達成状況報告】

※行動計画は、ほぼ実施できた。ただし、行動計画の中で、面談の際、必要に応じて履修モデルを活用して指導するとあるが、実際には履修モデルを活用できる場面がなかった。

個人面談では指導教員が学生の学習状況を把握し、これまでの学びを振り返ることを促し、更にゼミ決定について情報提供や相談にのるなど、きめこまかい指導を行った。

また年度初めのゼミ決定のオリエンテーションの際、ゼミ決定等に戸惑うことがないよう、編入生を対象として説明の機会を設けた。

○上記の内容を会議において学科全体にも周知した。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

第 2 学年後期における個人面談の取組は今年度初めてである。

指導教員にとっては学生の学習状況を把握し、丁寧な学習指導を行う貴重な機会となっている。また、第 3 学年のゼミ担当の教員から、ゼミについての相談に第 2 学年の学生が研究室を訪れたという

報告もあり、学生にとって有効なアドバイスになっていることが確認できる。更に、第 2 学年の指導教員からは学生との距離が近くなっているとの実感が報告され、この取組の効果があがっていると言える。

[改善すべき事項]

履修モデルについては、次年度以降の取組において、どのように位置づけるか検討する必要がある。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

・ゼミ決定のための配付資料

＜自己点検・評価委員会使用欄＞

＜所見＞

これまでになかった第 2 学年後半での面談指導を取り入れ、ある程度の成果をあげたことは評価できる。他方で、達成状況報告にも記されているように、「履修モデル」の活用に問題が残っている。このモデルは、学生の性質を考慮して考案された学科独自のものであるので、今後はこのモデルを有効に活用し、より高度な目標の達成を期待したい。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　**組織名：仏教学科**

記入責任者：ロバート F. ローズ

基準：4-3	＜評定＞　B ＜自己点検・評価委員会評定＞　B

1.【2014 年度の目標等】

[目標]　演習Ｉについて

「基礎演習」と連動した学生参加型「演習Ｉ」の授業を構築する

[達成基準]

1. 釈尊の八相成道を正しく書くことができ、自分のことばで説明できる。
2. 釈尊の「無我」思想の概略を他の人に説明できる。
3. 大乗仏教の大まかな流れと内容を他の人に説明できる。

[行動計画]

1. 読む・聞く・調べる・書くを授業の 4 要素とし、できる限り講義をしないように教材を準備する。
2. 演習Ｉａでは、「釈尊の生涯と思想」と「大乗仏教」を概観できるテキストを読むことを通して、不明箇所・調べ方などをグループワークしながら授業を進める。その都度ワークシートを準備し、予習に重点を置く。
3. 演習Ｉｂでは、現代文で書かれた仏伝・阿含等を読むことを通して、不明箇所・調べ方などをグループワークしながら授業を進める。その都度ワークシートを準備し、予習に重点を置く。

2.【2014 年度の達成状況報告】

講義中心ではなく、学生主体の演習Ｉの授業を構築することができた。しかし、達成基準に挙げた内容は広範囲にわたり、授業ですべてカバーすることはできなかった点に課題が残った。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

毎回ワークシートを学生に配布し、それをもとにテキストの不明な部分を調べる授業形態を構築し、学生が主体的に学ぶ形の演習Ｉを実現した。

[改善すべき事項]

1. テキストが 1 年生にはやや難しかったため、より平易なテキストを採用する必要がある。
2. ワークシートは毎回授業の初めに配布したが、予習を促すために、1 週間前に配布するようにするべきである。
3. 演習Ｉで取り上げる内容を明確にするため、前期（演習Ｉａ）では「釈尊の生涯と思想」、後期（演習Ｉｂ）では「大乗仏教」と、各セメスターのテーマを明記するべきである。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

1. 演習 Ia、Ib のシラバス
2. 演習 Ia のワークシート

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 　学生自身の作業を中心とした授業を工夫した様子が認められる。課題として学習の範囲の問題が挙げられているが、意欲をいかに引き出すかということも今後検討すべきであろう。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：仏教学科

記入責任者：ロバート F. ローズ

基準：5	＜評定＞　C ＜自己点検・評価委員会評定＞　C

※ 2013 年度の目標①を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

志願者増に向けての広報活動の強化

[達成基準]

入学定員を満たすこと

[行動計画]

1. 学科教員による高校訪問を計画的に実施する。
2. オープンキャンパスに生徒を導くための方法を検討し実行する。
3. 宗門・宗門外の寺院子弟を学科へ導くための方策を実施する。
4. 社会人を一層大学に導くための方策を実施する。

2.【2014 年度の達成状況報告】

入学定員を満たす方策として行動計画の 1～4 の取り組みを計画したが、それらを実施することはできなかった。そのため入学定員を満たすことはできなかった。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

京都市内の指定校からの応募者が増えた

[改善すべき事項]

1. 高校訪問計画を具体化に取り掛かったのが前期の後半になってしまったこともあり、今年度は学科教員による高校訪問は実施されなかった。来年度はより早い時期から具体的プランを立て、高校訪問を積極的に行う。
2. 行動計画の 2～4 については、今年度は具体化できなかったため、来年度は積極的に、かつ組織的に取り組む。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

＜自己点検・評価委員会使用欄＞

＜所見＞

実行可能な計画を立てるべきである。また、なぜ受験者が少ないのかの原因を検討すべきである（他大学の仏教関係学科がなぜそれなりに学生を集めているか、と合わせて検討すべきである）。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：仏教学科

記入責任者：ロバート F. ローズ

基準：4-2、4-3	＜評定＞　B ＜自己点検・評価委員会評定＞　B

※ 2013 年度の目標②を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

新 3 コースに対応した教育・研究体制の確立

[達成基準]

新 3 コースの演習Ⅱと演習Ⅲの接続および授業内容をシラバス化し、演習Ⅳとしての卒業論文指導体制を構築すること。

[行動計画]

1. 各コース担当者は前期終了をめどに演習Ⅱa を点検し、演習Ⅱb 担当者に接続する。
2. 後期開始と同時に、演習Ⅲの内容検討に入る。同時に卒業論文と演習Ⅳの関係に関する学科の方針を吟味する。
3. 各コースの教育・研究内容を年度末までに論文化する。これは各自の専門に関する視野の拡大と学生の動機付けを念頭においたものである。

2.【2014 年度の達成状況報告】

新 3 コースの演習Ⅱa と演習Ⅱb の接続および演習Ⅲの授業内容のシラバス化は達成したが、演習Ⅳの卒業論文指導体制を構築するには至らなかった。また各コースすべての教育・研究内容を論文化することはできなかった。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

1. 演習Ⅱa とⅡb の接続に関しては、各演習担当者の間で連絡を密にし、円滑に接続する体制を構築した。
2. 演習Ⅲの内容を検討し、それを反映したシラバスを作成した。

[改善すべき事項]

1. 演習Ⅳを卒業論文指導の授業として位置付けているが、その指導体制を構築することができなかったため、来年度にはそれを早急に行わなければならない。
2. 「現代と仏教」・「仏教思想」の 2 コースの教育・研究内容については、各コース担当者により論文が発表されているが、「文化美術」コースに関しては、まだ発表されていないので、早急に作成・発表する必要がある。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

1. 演習Ⅲシラバス
2. 仏教学セミナー100 号目次（現代と仏教コースに関連する論文は（1）新田智通「仏教の『スピリチュアル化』について―現代世界における仏教の変容」とロバート F. ローズ「この一枚の紙のうえに雲が浮かんでいる―チィク・ナットハンの仏教思想について」である。その他の論文は仏教思想コースに関連するものである。また箕浦暁雄も今年度の日本仏教学会で「苦悩の物語に対面する

こと —仏教学と社会的実践について語る視点」という題で発表し、来年度には『日本仏教学会年報』80 号に掲載予定であるが、これも現代と仏教コースに関連する論文である。）

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 2 回生から 3 回生そして卒業へ接続を、教育内容に関してコースごとに研究していることは大いに評価できる。それらが完全に実施されることを望む。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：仏教学科

記入責任者：ロバート F. ローズ

基準：6	＜評定＞　A ＜自己点検・評価委員会評定＞　A

※ 2013 年度の目標③を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

きめ細かい学生指導を実施し、原級留置・卒業保留率を減少させ、学生が主体的に学ぶような仕組みを構築する。

[達成基準]

2013 年度の実績を上回ること。

[行動計画]

1. 演習Ⅰ～Ⅲを学生参加型の授業に改めるためのノウ・ハウの研究と実施。
2. 問題学生の「問題」を学科内で正しく共有する。（毎月の昼食会等を利用する）
3. 指導教員は問題を抱えた学生と個別の面談を実施する。
4. 各授業のディプロマポイントを明確にし、学生に周知させる。

2.【2014 年度の達成状況報告】

きめ細やかな学生指導に向けての工夫は行われているが、十分な成果を上げてはいない。また留年率は若干改善しているが、概して留年率は高いレベルにとどまっている。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

1. 毎月の昼食会などを活用して、学科の学生の抱える「問題」を正しく共有する機会が増えた。
2. 情報を共有することにより、教員が互いにアドバイスしたり、助け合う体制が構築できた。
3. 情報を共有することにより、様々な指導の方法（例えば学習支援室などと緊密に連絡を取り学生を育てる等）で、個別指導が必要な学生の指導に役立てている。

[改善すべき事項]

1. 演習Ⅰ～Ⅲを学生参加型の授業に改めるために、各演習担当者は様々な工夫をしているが、それを学科全体で共有するシステムを構築するところまでいたっていないことが課題として残っている。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

＜自己点検・評価委員会使用欄＞

＜所見＞

顕著な成果は上がっていないが、きめ細やかな学生指導は大いに評価できる。今後、継続されれば大きな成果が期待できる。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：哲学科

記入責任者：門脇　健

基準：4-3	＜評定＞　B ＜自己点検・評価委員会評定＞　B

1.【2014 年度の目標等】

[目標]　演習Ⅰについて

文章を読み、問題を発見し、討論することを通して、問題を考察する態度を身に付ける。

[達成基準]

(1) 一定の長さの文章を、一定の時間で読み切り、大意をつかみ、まとめることができる。
(2) 文章の論理展開・構造を分析的に読み取り、文章や図解によって説明できる。
(3) 文章のテーマ、問いを読み取り、著者の考えを理解した上で、自らの考えを展開し、まとめることができる。
(4) ひとつの文章についての解釈の多様性に気づき、多角的に読むことができる。
(5) 自分の解釈と他人の解釈の違いを理解しながら、対話、議論することができる。

[行動計画]

(1) 広い意味で考えることを促す日本語の著作をテキストとして用いる。
(2) 予習として、授業で取り上げるテキストを読み、読書メモ、要約などを書かせる。
(3) 授業では、テキストについての質問や意見を自由に発表させ議論させる。
(4) 発表者を予め決めておき、発表者が提示したものをもとに議論する。
(5) 議論においては、適宜、司会者や書記係などを指定して進行し、議論を要約させる。
(6) 必要に応じて、グループにわけて、調べたり議論をしたりし、グループ別の発表を行う。
(7) 発表、議論をふまえて、考えたことを文章にまとめさせる。
(8) テーマについて、より詳しく調べたり、関連図書を読んだりするなどの課題を与える。

2.【2014 年度の達成状況報告】

行動計画の（1）（2）（3）は演習Ⅰ参加者の大半について実施し、（7）（8）についてもほぼ達成することができた。しかし行動計画の（4）（5）（6）は、参加者の性質から班やグループ単位での学習量を抑制せざるを得なかったクラスについては十分には実施できなかった。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

とりわけ効果が上がったのは達成基準の（1）と（3）であり、これらについては、レポートの内容や、ディスカッションにおける発言内容と言った授業中の参加態度から、各クラスで効果が測定できた。

[改善すべき事項]

行動計画（4）（5）（6）が十分に達成できない理由となった、演習に積極的に参加できないタイプの学生への対処が必要になる。また、達成基準と行動計画がやや多岐にわたっているので、いくつかを統合して全体として到達度が評価判定しやすくすることも必要である。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

目標番号②に示す GPA（一年生の 28%が GPA1.5 以下）のほかは、レポートなどを採点した各教員の印象による判断である。

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 　テキストの文章を読み解き、議論し、さらに文章化してレポートを作成するという課題については、達成基準（1）と（3）について効果が確認されており、評価できる。行動計画（4）（5）（6）を実施することによって、受講生はテキストを「多角的に読む」ことや「解釈の多様性」を学ぶことができる。しかしながら、この課題については十分に達成できなかったとされ、その理由として「演習に積極的に参加できないタイプの学生」の存在が挙げられる。このようなタイプの学生にどう対応していくかは、目標番号②の課題とも関連することであり、学科全体でのより一層の取り組みが望まれる。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：哲学科

記入責任者：門脇　健

基準：6	＜評定＞　A ＜自己点検・評価委員会評定＞　A

※ 2013 年度の目標①を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

初年次における定着率の上昇 （初年次学生の大学への帰属意識を高めさせることによって、中途退学を防止し、大学での学びを軌道に乗せる。）

[達成基準]

(1) 全員に面談できたか。

(2) 年度末に、2014 年度入学者の退学および休学の数を確認し、前年度と比較して改善が見られたか。

[行動計画]

(1) オフィスアワーを利用して、全員の面談をする。これは、学生個々人の把握ということもあるが、同時に、授業、部活・サークル、友人関係以外の居場所を意識させ、様々な形で大学に居られるということを実感してもらう狙いがある。

(2) 個別面談をふまえ、必要に応じて、再度の面談など、適切なフォローを行う。

(3) 退学、休学の理由に関しても、把握できる範囲で分析する。

2.【2014 年度の達成状況報告】

行動計画（1）の面談に関しては全員に実施できている。行動計画（2）の再度の面接によって生活面も含めて有効なアドバイスもできている。行動計画（3）によって分析した結果、14 年度入学者では、2015 年 3 月 31 日時点では退学者は 2 名であるが、そのうち 1 名は最初から登校せず、もう 1 名は個人的な事情で教員側からケア・アドバイスできる学生ではなかったように判断している。後者の学生に関しては前期には授業に出られないということで個人授業をするなどの対策を講じたが、後期は欠席続きとなり結局退学となった。休学に関しては、完全分析できていない。

達成基準（1）は充たしたが、(2）は昨年度に比べ結果として目立った改善とはならなかった。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

授業、面談などで本学の学風に親しんだ学生は、懇親会などにも積極的に参加することになっている。

[改善すべき事項]

授業や面談を欠席しがちで、休学・退学してゆく学生について、どの時期にどこまでケアできるかを検討すべきであろう。一年生の GPA が 1.5 以下の学生が前期で 13 名でおよそ 28%、これを少しでも改善すべき。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

2014 年度退学者資料。2014 年度 GPA 資料。

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 　初年次の学生全員にたいして個人面談を実施し、また必要に応じて再度の面談など「適切なフォロー」を行なったことは高く評価できる。指摘されているように、丁寧な個人面談は教員への信頼感を育み、学生の大学への帰属意識を高めるうえで有効な手立てである。それに加えて、GPA が比較的に低く、かつ学習意欲が低調な１年生に対しては、学習面での援助や指導が、本学への定着を促すうえで不可欠である。この点についても学科全体での取り組みが望まれる。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：哲学科

記入責任者：門脇　健

基準：4-3	＜評定＞　B ＜自己点検・評価委員会評定＞　B

※ 2013 年度の目標②を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

卒業論文提出率の上昇　（論文執筆のための調査・考察の方法や、論文表現の技法を身につけさせる。そのことによって、卒論を完成・提出する率を上げると同時に、文章を読解しまた表現する能力を養う。）

[達成基準]

(1) 卒業論文提出率を、前々年度、前年度と比較して改善が見られたか。

(2) 2013 年度 3 年生の年度末における卒業論文提出資格不可者の数を確認する。

[行動計画]

(1) 2年次から、ゼミの中で何らかのテーマに基づいた文章を書かせて、それをゼミで共有し、また教員が添削することで、自分の表現と周囲の理解の間に差があることを実感させる(自分の文章が他人の目にさらされ、その評価が自分に返ってくるという経験を繰り返して、その経験を文章表現の洗練に反映させる)。例えば、3年生の時点で「大学での学びの内容」を表現できるかを確認する(このことは、研究の内容を明確化することに役立つと共に、就職活動において大学での学びをアピールすることにも繋がる)。学年が進むにつれて段階的に文字数を増やしていき、卒論の準備への技術的・心理的障壁をできるだけ取り除くことを目指す。

(2) 各学期において、早い時期から期末レポートの作成を意識させ、時間をかけてレポート作成に取り組むように促す。

(3) 各ゼミの特色を生かした指導を工夫する。

2.【2014 年度の達成状況報告】

行動計画がそれぞれのゼミで実施されたが、それが達成基準を満たすことにはつながらなかった。就職活動の不調などから卒論を早い時期に諦める学生が見られた。また、卒論は合格したが、単位不足で卒業できなかった学生も目立った。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

卒論に取り組めた学生の卒論のテーマ自体は各自クリアになっている。

[改善すべき事項]

第 4 学年の留年率が 2012 年度から 2014 年度にかけて増加していることと、第 3 学年の卒業論文提出不可者の割合は 2012 年度から 2014 年度において、波があることがどのように相関しているかを検討し、4 学年の留年率増加を解釈し対策を立てること。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること
卒業・修了判定者一覧（教務課作成、2012 年度、2013 年度、2014 年度版）及び文学部卒業論文提出資格判定者数一覧（教務課作成、2012 年度、2013 年度、2014 年度版）

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 2 年次以降に実施された文章表現力の養成や、レポート作成の指導などが功を奏して「卒論に取り組めた学生」においては、卒論作成への意欲がより高まったものと思われ、この点は評価できる。しかしながら問題は、行動計画を実施したにもかかわらず、卒論作成に積極的には取り組めず、提出を見送った学生たちへの対応である。卒論提出率の向上のためには、この点に関して学科全体で問題を分析し、新たな対応策を検討する必要があるだろう。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：社会学科

記入責任者：志藤　修史

基準：4-3	＜評定＞　A ＜自己点検・評価委員会評定＞　A

1.【2014 年度の目標等】

[目標]　演習Ｉについて

「学びの発見」や「専門の技法」との関連性をふまえ、基本的な、調べる、まとめる、記述する、発表するという「学びの発見」での作業と、社会学の基本的研究方法を学ぶ「専門の技法」の講義内容を個人レベルに引き付け習得し、社会学的問題やトピックスを取り上げた文献や資料を判読し、要約や論点の整理といった作業を通じ内容を理解する。

[達成基準]

少なくとも半期で新書ならば 1 冊以上を精読する。また、理解したことについてレジュメを作成し、レジュメに基づく報告を行う。

[行動計画]

講義の目的や狙いを伝え（1 回）各自の問題意識によるグループ分けと問題意識のすり合わせを行い（1～2 回）、各グループにおいて最低 1 冊の文献を取り上げ読む（自宅並びに講義外作業）。
読んだ内容からグループ内で考察を深め、グループでの議論をレジュメにまとめたうえでプレゼンテーションを行う（12 回。しかし、問題意識を深め、2 回生以降のコース選択やその後の学びを深めていくための、問題意識や問いをたてることができるようになるため、講義受講人数によるが最低でも半期に一人あたり最低 60 分はプレゼンテーションやその後のディスカッションの時間を確保したい。これは 18 人以下の演習でなければ実現できない。12 回＝60 分×18 人／90 分）
各個人・グループの発表内容と社会学で学ぶということとの関連を整理し、次年度以降の学習の準備について伝える（1 回）

2.【2014 年度の達成状況報告】

目標に向けた行動計画については、ほぼ計画内容通り取り組むことができた。また、教員によっては地域の団体との連携で近隣住民へのヒアリングを実施したり、NPO や社会活動を実施している団体よりゲストスピーカを招聘したりするなど工夫をしながら取り組んでいた。ほぼ全ての学生が 1 年次の終了時にコースの内容を理解し、自らの今後の研究方向を確定することができた。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

2 年次からの学習研究内容への目標を持つ学生が増えた。

[改善すべき事項]

各教員個々の取り組みによる所が多く、共通性にかける部分がある。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

①　伝記プロジェクト資料

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 　学科での学びを地域と連携して取り組んでおり、評価できる。「伝記」の作成を通じてコミュニケーション力やプレゼンテーション力をつけようと努力していることが、根拠資料にもあらわれている。ただし、［改善すべき事項］でも触れているように、根拠資料には 1 クラスのみの様子しか記されておらず、クラスにより温度差があるようにも見受けられる。継続して取り組んでいただきたい。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：社会学科

記入責任者：志藤　修史

基準：6	＜評定＞　C ＜自己点検・評価委員会評価＞　C

※ 2013 年度の目標①を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

「就職力」の向上

[達成基準]

仕事や就職に対する関心を、「知る」、「調べる」、「体験する」など具体的行動へ結びつけることのできる学生を増やす。

[行動計画]

NPO 法人あったかサポートによる講演会及び演習を実施する。特に就職活動を始める 3 回生の参加を呼び掛ける。また、就職活動を行っている 4 回生で関心ある学生にも参加を呼び掛ける。

2.【2014 年度の達成状況報告】

本年度は新コースの準備のため、9 月 21 日藻谷浩介氏を招いての特別公演会、3 月 21 日に卒業生並びに現役 2 回生による社会学科での学びに関するシンポジウムをはじめ多くの取り組みを行ったため、この企画については未実施である。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

[改善すべき事項]

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

「藻谷浩介氏　講演会」チラシ

＜自己点検・評価委員会使用欄＞

＜所見＞

計画に掲げた講演や演習は未実施ということであり、基準は達成されていないと判断される。2013 年度に行われた講演会やワークショップに参加した 3 年生（約 100 名）の、その後の就職活動にかかわる情報を点検させ、就職に対する意識向上を図るなど、講演以外にも継続できる活動もある。次年度にむけ、様々な角度から取り組まれることに期待する。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：社会学科

記入責任者：志藤　修史

基準：4-3	＜評定＞　S ＜自己点検・評価委員会評価＞　S

※ 2013 年度の目標②を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

社会に貢献できる生き方を実践する力をつけるためのアクティブ・ラーニングの実験的実施

[達成基準]

アクティブ・ラーニングのプログラムに向けた開拓的授業を各学年で実験的に実施し、適宜報告書としてまとめる。

[行動計画]

2 回生の「フィールドワーク」における調査演習、3 回生の社会福祉実習に向けた現場職員との事前ワークショップ並びに実習など各学年において開拓的プログラムを実施。同時に、ボランティア活動への積極的参加、学生による地域の社会福祉施設へのヒアリング調査などを実施することで、社会への貢献や社会参加などの実践力を身につけるためのプログラムについて検討する。なお、実施した内容についての成果は報告書としてまとめる。

2.【2014 年度の達成状況報告】

2 回生の現代社会学・文化人類学コース学生を対象にした「フィールドワーク」は講義にて取り組んだ。また、社会福祉学コースの 2 回生を対象に、京都府人材育成プログラムを活用し与謝野町への自治体福祉施設へのフィールドワークを実施。同じく社会福祉学コースでは、社会福祉実習に向けた現場職員との事前ワークショップは社会福祉学コースの 3 回生全員が参加し、社会福祉施設の職員との実習のポイントや、事前の学習の内容等について意見交換を行った。さらに社会福祉学コースの 2 回生から 4 回生では、奈良県大淀町での生活実態調査に参加している。また、学園祭時にボランティアコーディネートを行うブースを開設した。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

問題の発見と具体的な調査やアンケート、制作物の作成など学生にとっては非常にハードルの高い内容を要求しているが、積極的にかかわる学生がほとんどであり、社会学を学ぶことの楽しさにつながっている。

[改善すべき事項]

より多くの学生の参加を促す。そのための教員の体制。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

① フィールドワーク報告書
② 社会福祉実習報告書
③ 北部フィールドワーク報告書
④ 雑誌「同朋」の抜粋

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 　各コースの教員と学生が、それぞれ意欲的に取り組んでいる様子が、根拠資料からも看取できる。報告書も数種作成できており、計画が実行され、目標を十分達成できている。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：歴史学科

記入責任者：平野寿則

基準：4-3	＜評定＞　A ＜自己点検・評価委員会評定＞　A

1.【2014 年度の目標等】

[目標]　演習Ⅰについて

日本史・東洋史を大学で専門的に学んでいくための基礎知識を修得する。同時に内容についてまとめさせることで、文章能力を向上させる。

[達成基準]

概説レベルの日本史・東洋史の知識が身についている。
主語・述語の関係が適切な文が書け、全体として脈絡の通った文章を作成することができる。

[行動計画]

毎回、授業内容に関するレポートを課し、担当教員が添削する。

2.【2014 年度の達成状況報告】

日本史・東洋史に関する概説レベルの基礎的知識の修得、及び修得した知識に基づきながら、歴史の事象を的確にまとめ、自分の言葉で表現すると言う目標については、授業における小レポート、前期試験のレポート、後期の筆記試験を通じて、概ね達成基準を満たしていると言える。特に後期筆記試験は、自己の研究テーマについて①時代、②分野、③その理由を問う内容で、2 年生のコース決定の基礎資料ともなり、学生にとっては一年間を総括するものとなっている。そう言う点からも、自己の課題を考えていく基礎的な学びの力の修得につながっていると思われる。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

日本史については、古代から近現代までの基礎的な知識の、東洋史に関しては、高校の世界史とは異なる新たな知識の修得を通じて、自己の研究テーマを安易に決定することが減少し、テーマに関する自分なりの意見（理由）をもつことができるようになっている。

[改善すべき事項]

授業の進行上、毎回、振り返りのレポートを課して添削すると言う点は、必ずしも実行できていない。授業内容を振り返らせることは、最終的に全体を把握させる上でも重要な取り組みと言えるので、定期的にでも確実に実施していく必要がある。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 　達成基準は学生の視点になっているように見受けられるが、学科としての達成基準が明確でない点が問題として挙げられる。また、行動計画では、毎回レポートを課し添削をするという内容が明記されているが、改善すべき事項において「必ずしも実行できていない」という点から、行動計画の立て方においても課題があったと推測する。ただし、効果が上がっていることも確認されるので、評定は学科と同じ「A」とした。引き続き目標の達成にむけて実現可能な行動計画を立て、意欲的に努力していただきたい。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：歴史学科

記入責任者：平野寿則

基準：4-3	＜評定＞　B ＜自己点検・評価委員会評定＞　B

※ 2013 年度の目標①を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

卒業論文執筆に向けての個別指導の推進

「ゼミ」を大学での学びの要（かなめ）と位置づけ、発表や討議、レポート執筆を通じて、学生一人ひとりが、史・資料を読み解き課題に取り組む力や、自分の考えを表現する能力を身につける。

[達成基準]

卒業論文提出率を 90 パーセント以上とする。

[行動計画]

1. オフィスアワーの活用のほか、全ゼミ生を対象とした個人面談による個々の学生に合わせた指導を行う。前期・後期それぞれ少なくとも 1 回の個人面談を実施する。
2. 長期休暇中の課題を課すことにより、「ゼミ」への取組の関心を持続させる（2 回生 4,000 字、3 回生 6,000 字、4 回生 8,000 字程度のレポート）。また、2 回生、3 回生には学年末にも同様の課題を課す。
3. 「ゼミ」と講義や実践研究を関連づけて受講するよう履修指導を徹底する。

2.【2014 年度の達成状況報告】

2014 年度の卒業論文提出状況は、85.6%であり、基準として設定した 90%を達成することができなかった。

1 の個人面談による個別指導は積極的に行われているが、ゼミの人数に多少があり、一つのゼミで 20 名を越えるような場合は、物理的に不可能であるとの指摘もあった。

2 の長期休暇中の課題レポートについては、全てのコース・ゼミで実施することができている。

3 の履修指導についても、全体において実施されているが、学生の時間割に反映されない点に関しては、履修指導とは別の問題も指摘されている。

1 から 3 をはじめ、個々の取り組みによって、一方では各学生の学びの深まり、取り組みの積極性が確認できると同時に、他方では、今までの方途では必ずしも対応しきれない学生層が増えてきている点が指摘でき、この後者がマイナスの数字となって現れているようにも思われる。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

1 から 3 の取り組みの他、また 2 年生以降の各コース・ゼミの個別の取り組みによって、自己の研究テーマを明確にして個別の課題に取り組み、先行研究や資史料の読解に基づきながら、自分の言葉で卒業論文を執筆できるようになっている。

[改善すべき事項]

確実に今までの方途では対応しきれない学生が増加してきており、単に個人面談に留まらず、場合によっては、個別指導（レジュメ・レポート等の添削）の必要性がある。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 　本項目について達成基準に数値を明記して、取り組んでいる姿勢は評価できる。多人数のゼミにおける個人面談の実施や、履修指導が学生の時間割に反映されない点、また新たな対応が必要な学生への個別指導など、課題が明確になっているので、それらの課題について次年度に検討し、具体的に改善していくよう期待したい。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：文学科

記入責任者：加藤　丈雄

基準：4-3	＜評定＞　S ＜自己点検・評価委員会評定＞　A

1.【2014 年度の目標等】

[目標]　演習Ｉについて

「読み書き」を重視する「演習Ｉ」のねらい
文学研究における基本的な知識・方法を学び、文学科 4 コースそれぞれの文献（作品）読解と自らの見解の表現を試みる。

[達成基準]

1.　講義を正確に理解し、その内容を適切にまとめることができる。
2.　文献（作品）を正確に読みとり、その内容を適切に文章表現できる。

[行動計画]

授業方法

1.　文献（作品）の読解および論述の方法に関する基礎知識の修得。
　　講義によって、上記の理解と記憶を促す。
2.　文学科 4 コースそれぞれの具体的な文献（作品）解釈の技能の涵養。
　　実際に学生が担当して調べ発表することによって、上記の力量を養う。
3.　1・2 を踏まえて自らの見解を論述する経験を積む。
　　追加の調査・考察をも含めてレポートを書く。

授業計画

1.　文学研究の意義を学ぶ。
2.　取りあげる文献（作品）の概要および解釈上の留意事項を把握する。
3.　対象文献（作品）を精読し、読解上の必須知識を得る。
4.　読解内容の要約、解釈上の見解・所感を、適切に論述する。
5.　作成した論述文の講評を踏まえ、読解の深化をはかる。
6.　文献（作品）の魅力を探り、参照・参考文献の必要性を理解する。
7.　1～6 を振り返り、レポートを作成する。

2.【2014 年度の達成状況報告】

行動計画を実現させ、4 コースとも文献を読解し内容を把握する演習を行ない、成果をレポートに記述する課題に取り組んだ。結果、意識的な「読み書き」の実践が十分に成された。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

理解・考察の内容を記述するという意識の明確化

[改善すべき事項]

担当者間のみではなく学科教員への周知による改善策の企図

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

資料①　2014 年度シラバス

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 　達成基準は学生の視点になっているように見受けられるが、学科としての達成基準が明確でない点が問題として挙げられる。学科の評価は「S」となっているが、どのように達成基準を満たしていることを評価できるのかを検討する必要がある。行動計画は確実に実行し、その効果も確かめていることから、評価は「A」と判断する。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：文学科

記入責任者：加藤　丈雄

基準：4-1、4-2	＜評定＞　C ＜自己点検・評価委員会評定＞　C

※ 2013 年度の目標②を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

「グランドデザインカリキュラム案」の完成

2015 年度実施の方針が学部長より示されたので、具体的に担当者を決定し明記する。同時に現行カリキュラムとの科目数増減表を作成する。

[達成基準]

2013 年 7 月提出の「グランドデザインカリキュラム表」に担当者を非常勤まで含め明記した表の作成。及び、現行カリキュラムの科目数との増減比較表の作成。

[行動計画]

教員の異動を見据え、また非常勤の継続年数の問題をクリアできる担当者の検討と決定を各コースにおいて行い、カリキュラムを完成する。また科目数の増減を数値化することで、効率化が図れたか否か検討する。

2.【2014 年度の達成状況報告】

2014 年度初頭に大学の体制について執行部より提示があった。その提示は、本目標の前提条件に関わるものであったため、凍結せざるを得なかった。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

なし。

[改善すべき事項]

2 の事情より、なし。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

資料③　2012 年度案に基づくカリキュラム（＝2013 年度提出資料）

＜自己点検・評価委員会使用欄＞

＜所見＞

本項目については、ヒアリングを行い、学科が「凍結せざるを得ない」と判断したことについて聞き取りを行った。文学科として一体感のあるカリキュラムを作成し実現すべく進めていたが、大学の体制について執行部の指示があり、学科のあり方が変わる可能性が示されたこと、それにより学科として取り組むべき優先事項に変更が生じたことなどが、上記の判断の理由としてあげられる。本項目の評価としては「C」とならざるをえないが、この評価は当学科のみの責任とは言えない側面があることを付言しておきたい。どのようなカリキュラムのもとで学生の教育を行っていくかは継続する課題であると思われるので、ひきつづき実現可能なものから取り組んでいただきたい。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：文学科

記入責任者：加藤　丈雄

基準：4-3	＜評定＞　C ＜自己点検・評価委員会評定＞　C

※ 2013 年度の目標③を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

文学科 2 回生必修科目「文章表現法」実施のための具体的事項の決定

[達成基準]

① クラス分け規模の決定
② 担当者及び担当方法の決定
③ 授業の進め方の計画および成績評価基準の検討

[行動計画]

a. 小委員会において、クラス分け規模と担当者グループの素案を作成。
b. a を各コースで検討の後、学科会議で全体を検討し、決定。
c. 担当者グループで具体的な授業計画及び成績評価基準を検討、作成・決定する。
d. 学科会議で c について検討し、学科了解事項として周知する。

2.【2014 年度の達成状況報告】

2014 年度初頭に大学の体制について執行部より提示があった。その提示は、本目標の前提条件に関わるものであったため、凍結せざるを得なかった。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

なし。

[改善すべき事項]

2 の事情より、なし。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

資料 2-1 / 2-2「グランドデザインカリキュラム案について」および「グランドデザインカリキュラム表」（＝2013 年度提出資料）

＜自己点検・評価委員会使用欄＞

＜所見＞

本項目について、目標番号③と同様ヒアリングを行った。目標番号③の「グランドデザインカリキュラム案」と連動している目標番号④の内容を単独で進めていくことはできないので、目標番号③を凍結と判断したことで目標番号④も凍結することになったということの説明を受けた。目標番号③と同様、どのようなカリキュラムのもとで学生の教育を行っていくかは継続する課題であると思われるので、ひきつづき実現可能なものから取り組んでいただきたい。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：文学科

記入責任者：加藤　丈雄

基準：4-1、4-2	＜評定＞　B ＜自己点検・評価委員会評定＞　B

※ 2013 年度の目標④を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

「中国語」教職課程認定申請を目指す。

[達成基準]

課程認定申請に向けて以下のことを行う。

① 選定した教科の精査

② 申請書素案の作成

[行動計画]

「中国語」教職課程認定申請に向けて、必要な教科を精査し問題点を洗い出す。
関係部署と協議の上、申請書類の素案を作成する。

2.【2014 年度の達成状況報告】

① 2013 年度より変更となった文学部カリキュラムと対照し、免許取得科目の見直しを行った。具体的には、セット科目（F.「中国語を学ぼう」）に設けられていた科目が、現代総合科目となった際に全面的に名称変更されたため、新旧科目名称・新旧授業内容をシラバス・履修要項を対照して検討し直した。その結果、新たな「文学科　高等学校教諭一種免許状　中国語（案）」を作成することができた（資料 1）。また、高校において中国語教員の募集が実際に行われているかどうかを、京都府近辺を中心に調査した。その結果、平成 27 年度大阪府公立学校教員採用選考の受験案内に、中国語高校教員の募集があることを確認した（資料 2）。また、愛知県公立学校の教員採用選考試験受験案内にも、中学校において募集があることを確認した。愛知県は高校教員ではないが、中国語の免許を持っていれば、中学校の他教科の教員として、採用の際に有利にはたらくと考えられる（資料 3）。

② ①に手間取り、具体的な申請書素案の作成までには至らなかった。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

「中国語」高校免許申請に向けて、具体的な新科目案ができたことで、実現へと前進した。少数ではあるもののニーズがあることも分かり、申請の妥当性も確認できた。

[改善すべき事項]

『教職課程認定申請の手引』とつき合わせての検証にまでは至らなかった。継続課題となる。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

資料⑤−1　文学科高等学校教諭一種免許状　中国語（案）

資料⑤−2　平成 27 年度大阪府公立学校教員採用選考テスト受験案内（コピー）

資料⑤−3　平成 27 年度愛知県公立学校教員採用選考試験受験案内（コピー）

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 　本項目について、達成基準の②には至らなかったものの、①については着実に進められており、申請への取組が前進していることを確認できる。次年度には、目標の達成に向けて更に意欲的に取り組んでいただきたい。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：文学科

記入責任者：加藤　丈雄

基準：6	＜評定＞　B ＜自己点検・評価委員会評定＞　B

※ 2013 年度の目標⑤を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

1・2 回生の長期欠席者及び問題を抱えた学生への対応の検討と、持続的ケアの実施

[達成基準]

行動計画がすべて実行できたことをもって、達成と判断。

[行動計画]

① 1 回生：授業担当者及び担任が緊密に連絡を取り、長期欠席に至ると思われる学生、あるいは精神的・経済的問題を有する学生がいないか、気をつける。

② 上記の如き学生が見出された時は、速やかに聞き取りなどを通し適切な対処を行う。

③ 2 回生：1 回生の時の記録をもとに、授業担当者及び担任が見守りとケアを行う。演習Ⅱは各コースに分かれるので 3 回生進級への橋渡しも兼ねて各コースでも情報を共有する。

④ それぞれに記録を残し、今後に資する。

2.【2014 年度の達成状況報告】

行動計画①と②を踏まえ、今年度新たに、早い段階（4 月・5 月中）において 1 回生全員とクラス担任 4 名が各研究室にて面談を行なった。長期欠席者には、(1) すでに高校段階で問題を抱えている、(2) 大学入学以降何らかの理由で登校できない（しない）、の 2 つのタイプがある。各担任の研究室に 1 度でも出入りすることで（2）をできる限り減らすと同時に（1）の学生の把握に努めた。

さらに前後期 1 回ずつのクラス別懇談会や学生支援課主催の「新入生クラス別茶話会」の場もまた同じ目的意識のもとに実施した。

また、来年度入学予定者ですでに（1）に当たる生徒とは文学科主任だけではなく担任となる可能性のある 2 名の教員も入学前面談に加わり、情報共有を図るとともに新年度の細やかな指導の準備を行なっている（行動計画①②および④）。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

2 の達成状況報告で述べた取り組みは、必ずしも即効性を求められるものではないが（特に（1）のタイプの学生）、従来と比べ 1 回生の「クラス意識」や担任との親近感は高まったと言える。ただし、年度末のコース選択志望理由書を提出しない長期欠席者の数は昨年度とほぼ同数に留まっている。

[改善すべき事項]

1 回生担任団の横の連携は密であったが、それを 2 回生以降にフィードバックするという点が不十分であった。問題を抱えた学生の情報は取り扱いを慎重にしなければならない。サイボウズなどの情報共有ではなく書面や口頭で行なうため情報が学科全体には行き渡りにくい。今後は学科会議や小委員会の席で連絡をより密にする必要がある。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること
資料⑥-1「2014 年度コース選択志望一覧表」 資料⑥-2「2013 年度コース選択志望一覧表」 資料⑥-3「2014 年度長欠調査（学科別名簿）文学科（前期）」 資料⑥-4「2014 年度文学科所属学生長期欠席者状況調査表（後期）」（いずれも個人情報に関する事柄であるので取り扱いには十分注意されたい）

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 一人ひとりの学生へのケアを真摯に行おうとしている姿勢は評価できる。その中で、1 学年から 2 学年への連携、伝達という点、また上記のような取組にもかかわらず長期欠席者が同数にとどまっていることへの検討とその対策など課題が明確になっているので、引き続き目標の達成にむけて努力し、改善の方向へと進んでいくことを期待する。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：国際文化学科

記入責任者：喜多　恵美子

基準：4-3	＜評定＞　B ＜自己点検・評価委員会評定＞　A

1.【2014 年度の目標等】

[目標]　演習Ｉについて

文化的に多様化し国際化していく社会を生き抜く力を養い、広い視野を獲得する。情報や資料を偏見のない目で読み解き、自分の言葉でまとめたものをわかりやすく伝達する能力の育成をおこなう。

[達成基準]

欧米文化、現代アジア、文化環境コースの各分野に関わる基礎知識の獲得と、そこで得た情報を客観的に分析できるようにする。さらには獲得した知識を簡潔にまとめ、適切な表現を用いて人に伝達できるようになる。

[行動計画]

一ヶ月に一回程度、担当教員でミーティングをもち、授業の内容と指導方法を共有、調整することで授業の充実をはかる。ミーティングの内容は適宜、学科会議を通じて学科所属教員に報告し、授業内容・指導方法さらには問題意識や課題、その解決方法などを共有する。

2.【2014 年度の達成状況報告】

上記の目標および行動計画に沿って、担当教員で授業内容や方法を共有した。そして、学科会議で学科教員全体での共有化を図った。その際に報告された有効と思われる授業方法が他の教員によって活用されるなど、一定の成果は上がった。

「読み書き」能力の育成も重点的におこなった。「読み」については、配布資料の文章の要約をさせるなど、基本的な読解作業を行った。さらには、より理解力の向上を図るために、パワーポイントや映像などの視聴覚に訴える資料を用いて事象を把握させたのち、活字資料を配布し、自らが把握したことの言語化を図るという段階的な教育なども試みた。インターネットや携帯を日々身近に使うことは多いが、時間をかけて文章を熟読する機会が少ない学生、学問的な文章を読むことに苦手意識を持っている学生が増えている。そうした学生に対して、視聴覚資料を使うことで、授業で扱うテーマへの関心喚起と、読むことや理解することへの導入に役立たせた。

「書き」については、とくに理解した内容を筆記させ毎回提出させるなど、明確に言語化して表現させるようにした。最終的にレジュメを作成させ、発表することを通して、「読み」「書き」の自らの学びの成果がどのように評価されるのか、客観的あるいは他者からの評価の重要性について自覚させた。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

＊「読み書き」能力の育成においても、視覚資料の使用はかなりの教育効果が認められる。伝えたい内容がいったいどのようなものなのかについて、イメージを持つことができるようになった。

[改善すべき事項]

＊担当教員による予定した頻度での会合が時間的な制約等から開催できなかった。(今後はメール等の利用も含めて議論や共有する機会を増やす。)

＊独りよがりな文章にならないよう、客観性をもたせるように指導する必要がある。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 演習Ｉの授業において、視聴覚資料を活用することによって「読み書き」能力の向上をはかる取り組みは、十分な成果があったと評価できる。とくに文章を読むことに苦手意識をもつ学生にとって、視聴覚資料を用いた授業は、学習テーマへの理解と関心を深め、さらに活字資料を自ら読もうとする意欲を喚起するという点で教育的効果が認められる。また、「書く」力を養成するための担当教員の指導も適切である。学科へのヒアリングを通して以上の点が確認できたため、評価を「A」とした。目標を達成するために、担当教員間の連絡をさらに密にしつつ、継続して取り組んでいただきたい。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：国際文化学科

記入責任者：喜多　恵美子

基準：該当なし	＜評定＞　S ＜自己点検・評価委員会評定＞　A

※ 2013 年度の目標①を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

国際文化学科が主催する各種文化行事を充実させ、それらの体験を通じて多角的な視野と国際的感覚を身につける。

具体的な本学科の学びを対外的に知らせる。学生の学習意欲を高めるとともに、受験生をより多く集めるため、学科の学習内容、教員の専門や関心を紹介する「学科オリジナルサイト」をリニューアルし、内外に広報する。

[達成基準]

各種行事を実施し、事後にアンケートをとることで教育効果を図る。ホームページについては、前年度は休日、休暇中は一日平均 100 名以上に満たなかった学科オリジナルサイトへのアクセス数を常時、一日平均 100 名を超えるようにする。

[行動計画]

学科単独の行事とともに学内所定機関との協力体制のもとでおこなわれる各種イベントにおいて「国際文化学」とはどういうものか認識させる。「食文化」「茶文化」「環境」といったひとつのテーマを軸にして各地域の文化を横断的に考察できるような文化行事を計画する。その際、試食や鑑賞など体験性のある内容にするとともに、その背後にある文化的意味づけについても十分理解させる。また、留学経験や海外研修の経験などの報告、どのようなテーマで卒業論文を書いたかなど、国際文化学科における学びを学生の立場から紹介し、学生たちの成長に活かせるような情報として提供する。以上、学科を活気づけ、広報にもより効果的となるような学科の活動をおし進め、それを学科オリジナルサイトに反映し、広報することで学生や受験生へ学科の魅力をアピールする。

2.【2014 年度の達成状況報告】

学科オリジナルサイトへの一日あたりのアクセス数は、2014 年度は平均 101 名で、平均 83 名だった 2013 年度より 18 名増加し、平均 100 名以上という目標は達成できた。学生が中心となって学科のそれぞれのコースを外国語で説明する学科紹介ビデオを作成し、大学のホームページで公開することができた。2015 年 3 月末現在で視聴回数が約 1,500 回に達している。

8 月のオープンキャンパスでは「世界のお茶」を紹介するイベントを開催した。お茶に関する展示パネルを学生とともに準備し、試飲しながら、お茶をキーワードにして国際文化学とはどういうものかを来場者に体験してもらった。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

行事（「世界のお茶（東洋編）」「外国語カフェ」「ワインと日本酒講座」「世界のクリスマス」）は学科独自のページで紹介した。卒論の公開中間発表会については、それを実施したクラスは卒論題目を記述の上告知した。行事の際には学生にも準備に関わらせ、各文化の理解を深めさせた。オープンキャ

ンパスでのイベントに対してはよい反応が得られた。
[改善すべき事項]
大学休暇時期のアクセス数をさらに伸ばすよう努力をする。行事終了後参加者のアンケートをとったのは、「外国語カフェ」だけであったが、できるだけアンケートをとり次回の実施の改善に利用する。「留学や研修旅行の成果」については、今年度は載せられなかったが次年度には載せるようにする。学科紹介のビデオは学科のオリジナルサイトからもアクセスできるようにする。
4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること
「国際文化サイト訪問数統計数」

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 　学科主催の文化行事や「学科オリジナルサイト」、あるいは学生による学科コースの紹介ビデオなどを通じて、学科の魅力を内外に広報しようという学科全体の取り組みは高く評価できる。しかしながら、達成基準に記される、行事終了後のアンケートの実施については不十分であったように思われる。事後のアンケートは行事の教育的効果や、広報における効果を客観的に評価するために欠かせない判断材料である。この部分について更なる改善が望まれる。この点を考慮して評定をあえて「A」とした。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：国際文化学科

記入責任者：喜多　恵美子

基準：該当なし	＜評定＞　A ＜自己点検・評価委員会評定＞　B

※ 2013 年度の目標②を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

2013 年度に発足した文化環境コースは 2014 年度新規講義科目、「環境文明論 2」、「環境と文化 2」を開設する。これらの講義を通じて、それまでにそれぞれの国や地域の分野に縦割りされていた内容を幅広く連携させ、世界の地理や自然、気候といった国際文化学に必要な基礎知識の習得を目指す。また新規実践研究科目「野外調査演習 1・2」では、自然環境と文化・文明とのかかわりを、教室の外で直接自分の目で確かめ、考えることを目指す。これらの新たな国際文化学の学びを通して、文化環境コースを学生募集力のあるコースとして発展させ、2017 年の完成年にむけて学科が一丸となって努力していきたい。

[達成基準]

上記の新規開講科目を含むコース科目において文化環境学の魅力を伝え、来年度の新第 2 学年の文化環境コース希望学生を 10 名以上確保する。

[行動計画]

今年度の新規コース科目である「環境文明論 2」、「環境と文化 2」、「野外調査演習 1・2」、「国際文化演習 II-10a・b」の開講準備を進める。オープンキャンパスでは文化環境コースを軸にした学科シンポジウムを開催し、現代社会における文化環境学の必要性を受験生や一般市民に広く訴えていきたい。前期の「環境文明論 2」、「国際文化概論 a」の授業や、年度末の「演習Ⅱ・Ⅲ」選択のための説明会で文化環境コースの魅力を説き、このコースへの登録学生を増やす。文化環境コースで学んでいる学生の様子を学科独自のホームページで紹介することでこのコースの魅力を伝えていく。

2.【2014 年度の達成状況報告】

新規講義科目「環境文明論 2」と「環境と文化 2」は問題なく開講され、国際文化学科の学生に新たな視点の授業を提供することができた。新規実践研究科目「野外調査演習 1・2」はいずれも集中講義期間に開講され、野外調査を中心とした実践的な授業を行うことができた。8 月のオープンキャンパスでは複数講師によるシンポジウム的な模擬授業を行った。1 月に行われた第 1 学年向けのコース選択説明会では、文化環境コース希望者は 4 名であった。真宗学科から転学科する学生は、文化環境コースを希望している。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

文化環境コース関連科目は、学生にとって斬新な内容のようで、興味をもったという声を幾度か聞いた。前期開講の「環境文明論 2」は受講生 30 名、後期開講の「環境と文化 2」は受講生 60 名を数え、国際文化学科以外の学生も多く受講していた。学科内外に環境に関わる学問内容を教授することができた。

[改善すべき事項]

2015 年度第 2 学年の文化環境コース希望者は 2015 年 3 月 30 日で 5 名に留まり、目標の 10 名には届かなかった。学科オリジナルサイトのホームページが更新できていないので、来年度はこまめに更新していきたい。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

＜自己点検・評価委員会使用欄＞

＜所見＞

文化環境コースのコース科目の教育効果を高めるための取り組みや、またオープンキャンパスでの行事などを通じて、当該コースの魅力を広く内外に広報しようとする取り組みは評価できる。しかしながら、達成基準に示されるコース希望学生の確保が結果的に不十分であったため、評定を「B」とした。当該コースの学生募集力をどのように高めていくことができるのか、目標を達成するために学科全体でのより一層の取り組みが望まれる。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：人文情報学科

記入責任者：柴田　みゆき

基準：4-3	＜評定＞　S ＜自己点検・評価委員会評定＞　S

1.【2014 年度の目標等】

[目標]　演習Ｉについて

情報の収集・必要な情報の取捨選択・情報の再構築

前期：他者の話（講義）を聞いて、その内容をノートに取り、レポートで再現できるようにする

後期：文献を読み、その内容をまとめる力を養成する

を目標とする。

[達成基準]

(1)から(4)が前期、(5)から(7)が後期の内容である。

(1) iPad の導入とその意味が理解できる。

(2) 他者の話（講義）を聞いて、その内容を 5W1H の要素を含むメモを取る必要性が理解できるようになる。

(3) メモをもとに、用語の意味を「自分がわかるもの」「辞書をひいてわかるもの」「辞書に記載のなかったもの」に分類する。「辞書をひいてわかるもの」や「辞書に記載のなかったもの」に対し、iPad を利用して自分で調査ができるようになる。

(4) メモを取った内容について、レポートで再現できるようになる。

(5) 各自で研究テーマを考えた後、関連文献が検索できるようになる。

(6) 文献を読むことができ、さらに、その内容を要約することができるようになる。

(7) 調査結果を基にして、レポートの形式に再構築できるようになる。

[行動計画]

(1)から(4)が前期、(5)から(7)が後期の内容である。

(1) iPad の導入とその意味を理解させる。

(2) iPad にメモアプリをインストールさせて、メモを取らせる。

(3) iPad に辞書アプリをインストールさせて、毎回アクセスするように指導する。また、iPad で作成したメモの用語について、理解できないものについては自分で検索させる。

(4) レポートにまとめる。

(5) 自分で研究テーマを考え、それに関連する文献を検索させる。

(6) 人文情報学に関連する論文を要約させる。

(7) 自分で行った研究の内容をレポートとして出力させる。

2.【2014 年度の達成状況報告】

(1)から(7)までのすべてを 100%実施した

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

本講義を単位取得できた学生は、レポートを所定の形式に従って構築することができると判断可能である。

[改善すべき事項]
メモの取り方の教授に、さらなる工夫の余地がある。
4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 　受講者は、iPad を利用してレポートを作成する基礎的なスキルを身につけることができており、その後の学習に大変役立っていると考えられる。今後も引き続き、同様の成果が得られるよう取り組んでいただきたい。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：人文情報学科

記入責任者：柴田　みゆき

基準：6	＜評定＞　A ＜自己点検・評価委員会評定＞　A

※ 2013 年度の目標①を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

2012 年度～2014 年度の目標　　保証人との連携を強化

3 か年計画の 3 年目

［2014 年度］

単位不足、あるいは成績不振の学生へは、年度末に保証人との面談を実施し、面談率を 90%以上にする。

[達成基準]

(1)　入学式・オリエンテーションにおいて、保証人に人文情報学科の方針や大学での履修方法などを説明する。

(2)　単位不足、あるいは成績不振の学生に対して、年度末に演習（ゼミ）担当教員が保証人との面談を実施し、面談率を 90%以上にする。

(3)　成績表の説明書については、ブラッシュアップされたものを完成させる。

(1)・(2)・(3)のすべてが実施できた時に、達成できたと判断する。

[行動計画]

(1)　入学式・オリエンテーションにおいて、保証人に人文情報学科の方針や大学での履修方法などを説明し、1 回生の授業担当教員を紹介する。

(2)　単位不足、あるいは成績不振の学生に対して、年度末に演習（ゼミ）担当教員が保証人と面談する。

○学科会議およびメーリングリストにおいて、各演習（ゼミ）での成績不振の学生に対する情報交換を行い、面談の実施状況を確認する。

○面談で取り上げる内容について一本化を図る。

○学生の成績情報について、教務課と情報交換を行い、連携を強化する。

(3)　成績表の説明書を修正し完成させる。

2.【2014 年度の達成状況報告】

(1)入学式後に、学科主任から説明、その後入学式に参列した教員紹介及び一言ずつのコメントを行った。

(2)4 回生時の留年生全 30 名を対象に、初回留年生はゼミ担任教員から、2 回以上の留年生は学科主任単独または学科主任とゼミ担任教員の両方で、電話連絡及び必要に応じて面談を行った。初回留年生への連絡達成率は 95%、2 回目以降の留年生への連絡達成率は 90%であった。保証人は面談を望まれないことが多く、電話した連絡数を母数とした時の面談率は初回留年生 39%、2 回目以降の留年生は 9%であった。

連絡・面談に際しては、教務課だけでなく、学生支援課、キャリアセンター、学生相談室のご助力

も得て行った。 (3)成績説明書のブラッシュアップは行わなかった。
3.【点検・評価】
[効果が上がっている事項]
面談や電話連絡においては、大学に対する信頼感を回復させることができ、今後の学生指導に対し教員のみならず大学全体で協力する体制を構築することができた。
[改善すべき事項]
学生の状態によっては、保証人との直接連絡を避けたほうが効果的であることがわかった。また、保証人が面談を望まないケースも多かったが、それは必ずしも学科からの働きかけに非協力的であることを意味しない。実状にあわせ、今後の達成目標とその値の母数を変更すべきと思われる。 成績説明書のブラッシュアップは、次年度以降に継続作業とする。
4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること
2014 年度保証人との連絡率（人文情報学科）.xlsx

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 保証人との面談率は 90%に達していないが、連絡達成率は 90%となっている。面談を希望しない保証人も多いということなので、これ以上の数字の上積みは困難であったと思われる。また、電話連絡でも大学への信頼感の回復につながっているので、保証人との連携を強化するという目標は達成されていると言える。成績表の説明書のブラッシュアップについては、完成はしていないものの、修正は行っているということである。次年度の完成を目指して取り組みを継続していただきたい。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：人文情報学科

記入責任者：柴田　みゆき

基準：4-3	＜評定＞　S ＜自己点検・評価委員会評定＞　S

※ 2013 年度の目標②を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

2012 年度～2014 年度の目標　　学生の学習意欲を喚起する。

3 か年計画の 3 年目

［2014 年度］

学科に関連の深い資格試験に合格させたり、学科で必須のタイピング技能を向上させたりすることで、勉強全体に対しても「やればできる」という積極的な姿勢を身に付けさせる。

科目によっては、その授業内容を「学び紹介」として公開し第三者からの評価を受けることで、授業に対するモチベーションを高める。

全学科生を対象とした授業の満足度・学習意欲の充実度についての面談を来年度前期に予定し、実施案を完成させる。

卒業式において、学科内での成績優秀者を表彰する。

[達成基準]

(1) 学科に関連の深い資格試験を紹介し、興味のある学生に対しては受験対策を考える。
(2) タイピングコンテストを実施し、コンテストに向けて練習させる。
(3) 授業内容について、できるだけ「学び紹介」としてホームページなどに公開する。
(4) 全学科生を対象とした個別面談については、実施計画を完成させ、シミュレーションを行う。
(5) 卒業式において、学科内での成績優秀者を表彰する。
(1)・(2)・(3)・(4)・(5)のすべてが実施できた時に、達成できたと判断する。

[行動計画]

(1) 学科に関連の深い資格試験について、3 号館入口にポスターを貼り紹介することで情報を公開する。さらに、興味のある学生に対しては演習（ゼミ）で受験対策を考える。
(2) タイピング技能の向上を図り、学習へのモチベーションを持たせる。演習（ゼミ）で技能の向上を図るよう促し、コンテスト情報を告知する。また、コンテストへの参加とともに、スタッフとしての参加も募り、コンテストの周知徹底を図る。
(3) 授業内容について、オープンキャンパスなどを通じて「学び紹介」として公開する。
(4) 個別面談について、学科全体で行う前にシミュレーションを行い、問題点を洗い出す。
(5)　3 月の学科会議で「成績優秀者」を決定する。

2.【2014 年度の達成状況報告】

(1)学生への情報提示と受験対策につき、以下の 4 項目を具体的に実施した。

a. 学科学生全体に対しては、3 号館玄関のガラス扉に推奨資格試験のポスターを掲示すると同時に、入り口横のテーブルに申込書を設置した。

b. 1 回生に対しては、必修科目「学びの発見」において、複数の推奨資格試験のパンフレットを全員

に配布し、資格試験全般についての説明を行った。

c. 3〜4 回生に対しては各ゼミの内容とリンクする資格試験を整理し学生に受験を促した。

d. 複数のゼミで、所定の演習時間外に受験対策を行った。

・池田ゼミにおいて、講義期間中（通年）に毎週一回の IT パスポート試験を行った。

・山本ゼミ（図書館学課程の希望者含む）において、講義期間中（10 月〜11 月末）に毎週一回の検索技術者検定 3 級（旧：情報検索基礎能力試験）対象勉強会を開催した。

(2)各演習でタイピング練習をした上で、以下の 2 回、タイピングコンテストを行った。

a. 6 月 2 日（月）16:20 より 3 号館において、本コンテストの予行演習を兼ね、人文情報学科学生のみを対象としたプレ・タイピングコンテストを開催した。

b. 6 月 15 日（日）13:40 より 3 号館において、参加制限無しのタイピングコンテストを開催した。

(3)4 月に YouTube 大谷大学チャンネルにて、松川ゼミ生が学び紹介の動画を公開した。また 3 月に、福田ゼミが学科オリジナルサイトで学び紹介の動画を公開した。さらに、6 月のタイピングコンテストにおいて、運営に携わった学生が今迄受講した演習内容を活かしたパンフレットの作成やコンテスト中に再生する音楽を作曲し、それを来場した高校生やその保護者に提示した。

なお、オープンキャンパス内での学び紹介は、本報告書目標番号⑤にまとめて記載した。

(4)大学に通学する学生に対しては、サブゼミやオフィス・アワーや茶話会などの時間を使って実施した。

(5)3 月 18 日の卒業式後に各学科にわかれて行われた学位記授与後に、学科主任よりベスト卒論賞及び準ベスト卒論賞の受賞者をそれぞれ表彰した。ベスト卒論賞受賞者は、顔写真とともに学科オリジナル Web サイトにて紹介した。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

(1)について、入り口に設置した申込用紙を利用して資格試験を自主的に受験した学生がいることがわかった。また、教員に紹介されてはじめて当該資格試験の存在を知った学生がいることがわかった。

(3)について、学生の学習意欲を喚起することができた。特にタイピングコンテストにおいては、可能な限り学生に運営を企画実行させた結果、今迄受講した講義・演習内容が有機的に活かせることを実感し、総指揮を担当した学生はその後『イベント運営における情報管理』という題目で卒業論文を執筆するに至った。

(5)ベスト卒論賞の存在が在校生（特に 4 回生）に周知されていることがわかった。能力の高い学生のさらなる学習意欲喚起に有効であることがわかった。

[改善すべき事項]

(1)について、本部キャンパス総合整備計画に伴い 3 号館が取り壊されるため、代替の掲示場所を検討する必要がある。

(2)について、リハーサルとして行ったプレ・タイピング・コンテストと本番を比較した結果、平日に行ったプレコンテストが本番より集客能力があることがわかった。次年度は、オープンキャンパスとの同時開催ではなく、平日に学科学生のみで行うことを検討すべきであろう。

(4)について、次年度以降も引き続き実施できるよう、実施計画をモデル化する必要がある。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること
(2)に対し、a. 実施報告書　b. 第３回タイピングコンテストプログラム (3)に対し、 a.　４月の紹介映像　https://www.youtube.com/watch?v=vzNMLisG58A b.　６月の紹介映像　https://www.youtube.com/watch?v=QztesBTZYXU c.　３月の紹介映像　http://www3.otani.ac.jp/hi/whats_new/otaniyochien_website/ (5)に対し、http://www3.otani.ac.jp/hi/whats_new/2014_graduation/

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ ３カ年計画の３年目に入り、学生の学習意欲喚起のために行われているさまざまな取り組みがさらに充実し、それぞれ効果をあげていることがうかがえる。今後も引き続き、同様の成果が得られるよう取り組んでいただきたい。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：人文情報学科

記入責任者：柴田　みゆき

基準：4-3	＜評定＞　A ＜自己点検・評価委員会評定＞　B

※ 2013 年度の目標③を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

2012 年度～2014 年度の目標　新コースの魅力を学生に伝え、図書館および周辺組織の機能を理解させる。

3 か年計画の 3 年目

［2014 年度］

授業の一環として、講演会の開催、図書館及び図書関連組織の見学、紙の作成・印刷など実地の活動を行う。

[達成基準]

(1) 図書館および図書館関連組織に所属する人の講演会を開催し、現場の状況を理解させる。

(2) 図書館および図書館関連組織の見学を行うことで、図書館業務を身近に感じてもらう。

(3) 図書館周辺の活動を行うことで、図書館及び出版・印刷などについての幅広い知識を得てもらう。

デジタルライブラリーコースでも、デジタルの部分はある程度学内で理解させることができるが、具体的な活動については、現場で作業することが必要になる。この(1)・(2)・(3)によって、図書館業務の多様性と奥の深さ、図書館はそれだけで成り立っているのではなく図書館に関連の深い組織が支えているということを気づかせる。

(1)・(2)・(3)すべてが実施できた時に、達成できたと判断する。

[行動計画]

(1) 講演会について、なるべく多くの学生、すなわち人文情報学科以外に図書館学課程および司書教諭課程受講者へも参加を呼び掛ける。講演内容に沿って、予め学生に調査させ、簡単なレポートを書かせる。講演者へは、レポートの内容を盛り込んだ講演を依頼し、最後に質疑応答をしてもらう。人文情報学科以外の学生も参加可能としておくことで、様々な立場の学生の意見を聞くことができ、これによって、学生の理解度と満足度を高める。

(2) 予め、見学する組織について調査し質問を考えさせてから見学を実施する。見学終了後は、チームで見学内容を話し合う。これによって、学生の理解度を高める。

(3) 実際に紙の作成・印刷などの活動を行うことで、出版・印刷の歴史を知ることができ、ひいては図書館の活動が理解できる。

2.【2014 年度の達成状況報告】

(1)及び(2)について、すでに 2013 年度に行ったことと、また、2015 年度からのコース改変に伴いデジタルライブラリーコース名称の外部露出を控えたことを総合的に勘案し、中止した。

(3)について、視覚障がい学生のために、マルチメディア Daisy を使って、紙媒体の資料を音声化する計画を立て、コースを限定せずに人文情報学科在学生全体に参加を呼びかけた。応募した学生を対象として、デジタルライブラリーコースに関連の深い『図書館案内』の音声化に取り組ませた。

作業日：　2014 年 11 月 11 日、11 月 17 日・18 日、12 月 9 日、2015 年 1 月 5 日、2 月 3 日 参加者：　人文情報学科　1・2 回生　7 名
3.【点検・評価】
[効果が上がっている事項]
デジタルライブラリーコース生だけでなく、人文情報学科在学生全体に呼びかけたことで、コース名とその具体的な内容を周知することができた。
[改善すべき事項]
(2)については、現デジタルライブラリーコース受講生のみならず学科学生全体に有効と思われるので、学科全体の取り組みの一部として継続実行予定である。 (3)について、マルチメディア Daisy による音声化は 2014 年度中に完成する予定だったが、変換作業中に不具合が起こった。2015 年度に、学科全体の取り組みの一部として継続実行予定である。
4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 4 コース制から 2 コース制へ移行し、デジタルライブラリーコースという名称の外部露出を控えたという事情は理解できるが、講演会と、図書館及び図書館関連組織の見学は中止したということなので、当報告書の目標が十分に達成されているとは言えない。視覚障がい学生のための資料音声化は継続していただきたい。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：人文情報学科

記入責任者：柴田　みゆき

基準：4-2、5	＜評定＞　B ＜自己点検・評価委員会評定＞　B

新設

1.【2014 年度の目標等】

[目標]

旧 4 コース制から新 2 コース制（「情報マネジメントコース」と「メディア表現コース」）への移行を学外に周知する。

[達成基準]

・周知対象を 3 種類に分類し、対象毎の実施率で判断する。

・なお、上記基準設定に関わらず、新入生定員（100 名）充足をもって 100%の達成とする。

[行動計画]

(1) 行動計画概要

(ア) 対象を高校生・高校の進路指導教員・他大学教職員の三種類に分類し、それぞれの層に対し、人文情報学科の新コース移行の妥当性と新規性の理解を促す。

(イ) 具体的な行動は、高校生が進路を決める 9 月末迄の半年間に集中させる。

(2) 高校生を対象に、イベントや動画配信を行う。イベントについては、入学センター主催「オープンキャンパス」との連動を想定するが、連動が難しい場合、学科単独で行う。

(ア) 新コース移行の妥当性と意義が具体的に理解できるよう、教員と学生の対談を公開する。

(イ) 在学生の学習成果の発表の場を高校生に公開する。

(ウ) 過去の講義成果物の動画を、YouTube で配信する。

(3) 高校の進路指導教員を対象に、学科独自の教育教材及び講義成果物を持参しての教員による高校訪問を行い、新コース体制移行の妥当性と将来性を理解していただく。

(4) 大学教職員を対象に、公益社団法人　私立大学情報教育協会主催の「教育改革 ICT 戦略会議」(2014 年 9 月 3 日（水）～5 日（金)）において、学科のコース横断型プロジェクトの取り組みを発表する。

2.【2014 年度の達成状況報告】

(1)教員と学生の対談について、6 月のオープンキャンパスにおいて、新コースである「情報マネジメントコース」担当予定の教員と小規模業種の社長でもある在学生との対談を行い、新コース設置の妥当性をアピールした。

(2)8 月のオープンキャンパスにおいて、新コースである「メディア表現コース」担当予定の教員ゼミに所属する学生による学び紹介を行った。

(3)尋源館を舞台に作成したゲームが iPad で動作する動画を、YouTube の大谷大学チャンネルにて公開した。

(4)京阪神地区の南部を中心に、3 校の高校を訪問した。また、学科オリジナル Web サイトを再構築し、2 コース制への移行をアピールした。

(5)「教育改革 ICT 戦略会議」（2014 年度版）において『PBL による電子書籍の作成』という題目で発表した。

3.【点検・評価】
[効果が上がっている事項]
無し（達成すべき項目は 100%実施したが、その効果を判定する材料に乏しい。）
[改善すべき事項]
新入生定員数を満たすことができなかった点につき、以下を改善すべきと判断する。 a. 周知対象のすべてで、旧 4 コースに加えての新 2 コースの追加と誤解されていることが多かった。この点につき、学科広報の方法を改善する必要がある。 b. 高校訪問を 4 月時点での計画通りに行うことができなかった。2015 年度は入学センターと密な連携を取り、早期から可能な限り沢山の高校訪問をする必要がある。
4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること
1. オープンキャンパスでの新コース担当教員と学生との対談（予告編のみ） https://www.youtube.com/watch?v=-FDlsaWt8l8 2. 人文情報学科松川ゼミ学び紹介、他目標番号③-(3)の資料 https://www.youtube.com/watch?v=QztesBTZYXU 3. 人文情報学科 2014 年度 iPad 活用実施報告 http://www.otani.ac.jp/jinbunjyoho_education.html#ipad_section7 4. 『PBL による電子書籍の作成』　発表抄録-C-8-Takahashi-Otani-univ.pdf

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 当報告書の達成基準から判断すると、評定は B とせざるを得ない。「改善すべき事項」は明確に述べられているので、今後この方向で取り組みを続けていっていただきたい。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：教育・心理学科

記入責任者：関口　敏美

基準：4-3	＜評定＞　A ＜自己点検・評価委員会評定＞　A

1.【2014 年度の目標等】

[目標]　演習Ｉについて

基本文献の読解を行い、内容を要約してレジュメにまとめることを通して、読み書きの力を育成する。
レジュメに基づいて発表し、質疑応答を行うことを通して、話す・聞く力を育成する。
上記の活動を通して、幅広い基礎教養を獲得させ、社会的な関心や課題発見的な意識をもつのに必要な素地を準備する。

[達成基準]

①～③の行動計画がすべて終了したことをもって達成されたと判断する。

[行動計画]

①テキストの要点を読み取り、レジュメにまとめることができるように支援する（読む・書く）。
②レジュメの内容をわかりやすく伝えたり、質問に答えたりすることができるように支援する（話す）。
③発表を聞いて感想や意見を述べたり、質問をしたりすることができるように支援する（聞く）。

2.【2014 年度の達成状況報告】

①前期は共通のテキストを使用し、予習としてテキストを読んでくること、授業後に振り返りとしてミニレポートを書くことを課題とした（読む・書く）。テキストを読んでこない学生もいたが、振り返りのミニレポートは毎回出席者全員が提出した。授業をふり返り、感想を書くためには、もう一度テキストに目を通す必要が生じるので、演習Ｉが読む・書く力を刺激する機会になったといえる。
②グループでテキストを分担し、全員が必ず報告を行うことを課題とした（話す）。報告前の準備として発表原稿を作るが、テキストの内容をきちんと伝えるためには、何度も読み返し、読む・書く力を総動員して要点をまとめなくてはならない。報告を担当した学生たちは「準備が大変だった」「発表は難しかった」と感想を述べていたが、この積み重ねがレポートや卒論に結びつくのである。
③聞き手からの質問があまり出なかった。質問をするほどテキストを読み込んでおらず、何を質問したらよいのかわからなかったようだ。振り返りミニレポートには、各自の感想や意見、質問などをそれなりに書けているのだから、これをもとに口頭で質問や意見、感想を述べればよいのである。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

①　後期は、共通のテキストはないので、担当者が選んだテキストを使う。例えば、あるクラスでは、レポートや論文の書き方を指導しているが、学生たちが慣れ親しんできた文章（日記や感想文）と論理的な文章（レポートや論文）の違いを知り、目的によって使い分ける必要があることを学習した。
②　③実際にディベートをする代わりに、「紙上ディベート」をグループで行った。ディベートを想定して原稿をつくる過程で、論理的に説明したり、相手側の発表に質問したり、相手側の質問に答えたりする必要がでてくるが、それが聞く力・話す力を鍛えることにつながった。

[改善すべき事項]
演習Ⅰでは、読む・書く・聞く・話すなど大学生としての言語能力の基礎を作る役割がある。本学科は、教職希望者が多いので、より実践的な部分でコミュニケーション能力を活用できるように、言語能力をバランスよく育成する必要がある。演習Ⅱにつなぎながら聞く・話す力を重点的に育成したい。
4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 演習Ⅰを通して「読み・書き・話す」能力向上についての当学科の取り組みは、概ね行動計画に従って達成目標を実現できていると評価できる。ただし、「聞く」すなわち質問することはコミュニケーションの基本であり、この点がまだ十分ではないと考えられる。【点検・評価】の「改善すべき事項」等を踏まえ、発表者に積極的に質問できるようになるよう、今後も引き続き取り組んでいただきたい。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：教育・心理学科

記入責任者：関口　敏美

基準：6	＜評定＞ A ＜自己点検・評価委員会評定＞　A

※ 2013 年度の目標①を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【2013 年度②】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]教職志望者のキャリアサポート体制の充実をはかる。

引き続き、1 年生・2 年生はゼミと「教職学習会」（月イチ開催）で、3 年生・4 年生はゼミと「教職直前講習」など、教職支援センターやキャリアセンターとも密に連携をとりつつ、学生が自らキャリアデザインに取り組めるよう学年進行に合わせたキャリアサポートを行う。

[達成基準]

①～③の行動計画が全て終了したことをもって達成されたと判断する。

[行動計画]

①保育士資格認定試験の受験サポート
②自発的なグループ（教職勉強会など）のサポート
③教育職員採用試験に関する情報の共有（教職支援センターと）

2.【2014 年度の達成状況報告】

①昨年度に引き続き、教職支援センター・実習支援センター・キャリアセンターと連携して幼稚園希望者に関する情報を共有し、東京アカデミーの講習、公立採用試験模試・解説講座など保育士資格認定試験の受験サポートを行った。保育士資格認定試験の受験状況は、5 名受験で 2 名合格であった（根拠資料参照）。
②昨年度に引き続き、オフィスアワーや水曜日放課後（会議のない日）の時間を活用し、ゼミ教員の個人研究室などで、試験勉強の習慣化をめざして有志の勉強会（ゼミ単位）を行った。特に後期からは、教職科目担当教員による希望者を対象とする定期的な勉強会が発足した（冬休み・春休みも含む）。学生主導の自主的自発的な教職勉強会に対しては、積極的に空き教室を開放して便宜をはかった。
③3 名の教員が教職支援センターミーティングに参加し、そこで報告された直前講習の受講状況や教員採用試験受験状況などを持ち帰り、学科会議（教職課程初等部会も兼ねる）で共有している。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

① 保育士資格認定試験の受験サポートは当初計画通り実行できた。
② ゼミ教員がサポートすることで学生有志が定期的に勉強会を行う環境が整備された。教員による勉強会では、希望者たちが熱心に勉強に取り組んでいる。その結果、参加者の中から自主的な勉強会が発展的に組織されるケースもあり、複数の学生主導の自主的自発的な教職勉強会が、定期的に、空き教室を利用して活動を行うようになった。
③ 全般に教員の理解が深まり、ゼミを通じて教職支援センター主催の説明会などへ参加を促している。

[改善すべき事項]

①昨年度の反省から、2014 年度は、幼稚園希望者の教育実習事前指導の際に保育士資格認定試験の受験状況について調査を行うことになった。しかしながら、幼稚園の教育実習を第 3 学年で実施するため、第 4 学年では事前指導がなく、受験状況に関する調査ができなかった。2015 年度は、第 4 学年については、ゼミごとに調査したものを学科で集約する必要があると感じた。

②教職希望者が多いゼミでは、有志による勉強会が自然に組織されていくが、教職希望者が少ないゼミでは、なかなか勉強会を立ち上げることができない。そこで教職希望者が少ないゼミに所属する学生をサポートする工夫が必要になってくる。教員による勉強会は、教職希望者が少ないゼミに所属する学生が、ゼミを越えた勉強会から自主的な勉強会を組織する契機としての可能性を示している。

4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること

①「2014 年度教育・心理学科卒業生の幼稚園就職状況について」

＜自己点検・評価委員会使用欄＞

＜所見＞

教職志願者の就職サポートについての当学科の取り組みは、十分に成果が上がっていると評価できる。特に大学側からのサポートの提供だけではなく、学生の自主的な勉強会を支援していることは高く評価できる。一方で、学年によって対応の遅れもあること、ゼミによって支援体制に差があることなど、新たな問題も認識されているので、【点検・評価】の「改善すべき事項」に基づき、今後も引き続き取り組んでいただきたい。

2014 年度　自己点検・評価報告書　　組織名：教育・心理学科

記入責任者：関口　敏美

基準：6	＜評定＞　A ＜自己点検・評価委員会評定＞　A

※ 2013 年度の目標③を受けて

継続　・　完了　・　ほかの目標と集約（集約した目標番号【　】）　・　取り下げ

1.【2014 年度の目標等】

[目標]心理学コースの学生に対するキャリアサポート体制の充実をはかる。

教職を目指さない学生のサポート体制充実のため、心理学コースの学生の進路・就職調査や支援内容に関するニーズ調査を実施して、取り組みの方向性を探る。

[達成基準]

行動計画①②の終了をもって達成されたと判断する。

[行動計画]

①心理学コースの学生を対象とした進路・就職希望調査、支援内容に関するニーズ調査を行う。
②教職を目指さない学生のキャリアサポート（キャリアセンターと連携）

2.【2014 年度の達成状況報告】

①　心理学コースの学生を対象に「心理学コース学生のニーズ調査」を実施した(回収率 81%)。
②　キャリア教育の第一歩として、演習Ⅰの時間に「大学生基礎学力調査」を全員に受験させている。昨年度に引き続き、学生が主体的にキャリア形成に取り組むことができるように、学年段階に応じたキャリアセンターの説明会・受験講習などの情報を、演習Ⅰ～Ⅳの授業時に逐次伝達し、教職以外の就職活動に関する情報提供を積極的に行った。

3.【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

①「心理学コース学生のニーズ調査」は、当初計画通り実行できた。
②演習Ⅰ～Ⅳで意識的に情報伝達に努めた結果、学生がキャリアセンターの企画に意欲的に参加するようになり、教職以外の就活モデルを学ぶ機会を得ることができるようになった。

[改善すべき事項]

教職を目指さない学生は、学科全体の 2～3 割を占めているが、学科の雰囲気が教職希望者向けなので、彼らには大なり小なり違和感があるようだ。途中で教職をやめた学生の場合、学科のカリキュラム編成が教職課程に偏っているのはある意味しかたがないことであるが、心理学コースで教職を目指さない学生からすれば、心理学に関する専門科目をもっと深く学びたいという思いにつながる（「教育の方に力を注いでいると思う。心理にももう少し力を注いでほしい。」「できればもう少し教育コースと心理コースを分けてください。」「心理学コースの学生のニーズ調査」問 5(1)学習支援関係についての自由既述より）。初等教育の教職課程をおく本学科では、学科開講科目の 8 割を教職科目が占めなくてはならないので、心理学の科目数は自ずと制限されるし、教育心理学の割合が高くなるのはやむを得ない。教職課程である学科のカリキュラムを変えることはできないが、学生に対する学習支援をきめ細かく行い、授業科目ではカバーしきれない部分を個別にアドバイスするなど、彼らの不安を解消し意欲的に学べるようなサポートが必要である。また教育学コースで教職を目指さない学生にもあてはまることだが、学生が、自信を持って粘り強くチャレンジできるような心理的なサポート(見守り・応援)

も必要なのではないかと感じた。
4.【根拠資料】　資料名を明記し、現物を添付すること
①「心理学コース学生のニーズ調査」

＜自己点検・評価委員会使用欄＞
＜所見＞ 　教職を目指さない学生の就職サポートについて学科として意識的に取り組んでいることは伺える。特に８割の学生からアンケートを回収し、その意向を把握したことは評価できる。そこで認識された問題点に対して、制度上の問題もあり、容易に実現できるとは思えないが、学生にとっては先延ばしできない問題であるので、【点検・評価】の「改善すべき事項」に基づき、今後も引き続き取り組んでいただきたい。